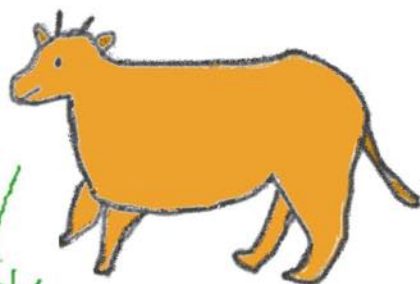


哀歌 其の一

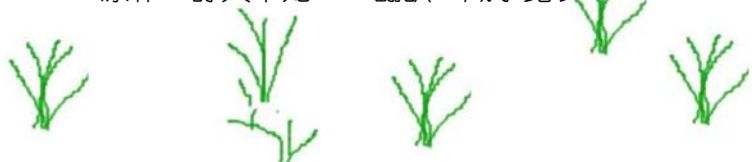


神様の憂鬱



原作：詠人不知

翻訳：蔵小路タマ





ハイイ、世田谷ネコのタマだよ。ここまで読んでくれてありがとう。あんたも付き合いいいね。ネコ並みにヒマってことかな。

イエスがカナンに来ちゃって、あっちの世界は麻のように乱れるかと思いきや、かなりの安泰ぶり。ローマとエルサレム派っていう二大権力の支配は磐石で、イエスの宗教運動なんて蚊が刺したほどの影響もなかったらしい。所詮、跳ね上がりの新興宗教だったってことかな。

でも、その新興宗教は消滅したわけじゃなかった。イエスの遺産をめぐって醜い主導権争いが起きたみたいで、利権と聞けば必ず顔を出すベンダサンも健在なんだ。人間社会はどうなることやら。

カナンでもひと騒動起きそうな予感。もしかして動物たちの楽園を破壊する侵略者が襲ってくるの？ ケツに火が点きそうになれば、いくら太平楽な動物たちでも何か考える。武力闘争では神様は全然役に立ちそうもないから、座して死を待つなら特攻隊で、ってなるんだらうな。まだ小火器もない力ナンは、どうやって闘うつもりだろう。

詳しくは次ページからのお話でわかります。なお原典の線文字B文書は大カプリ共和国のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

イエスの偽弟子

なんだ、早速かよ。まるで待っていたかのようだ。テレパシーの言ってたことは本当だった。髑髏ヶ丘でイエスが昇天するやいなや、エルサレム一派とローマ権力はそれぞれ「イエスの正統な後継者」なる人物をでっち上げ、力まかせの一大布教キャンペーンを開始した。イエスの一番弟子が二人現れたわけだ。彼らは精力的にイエスが築いた宗教勢力を乗っ取りにかかった。布教内容や言っていることは、ちよつと聞きにはどちらもイエスの言葉のようではあったが、愛や慈しみより罪や罰についての話が多く、悔い改めよ、いつか裁きが来る、等々、かなり脅迫的な内容にシフトしていた。生前のイエスは無闇に祈れなどとは決して言わなかったのに、どちらの一番弟子も民衆にまず祈ることを強要した。こうべを垂れよ、神を崇めよ、悔い改めよ、罪を知れ、等々、民衆はいきなり悪者にされた気分になった。そして、一番弟子に従う者たちだけが正しい人間とされたので、人々は『どこか違う』ような気がしな

がらも、これもイエスの教えかと思って受け入れてしまった。

一番弟子たちは民衆をギミックで釣ることもした。川の水をワインに変えたり、木の葉を金貨にしてみせた。水上歩行の実演や分身の術、精霊の乱舞など、神の子でなければ出来ないような技を披露した。もちろん裏にはタネも仕掛けもあった。

「さあて、一番弟子が二人も出て来た。仕掛けたエルサレムとローマ、どっちが勝つと思う？」神様はイエスに訊いた。

「民衆はそれほど愚かではありません。僕はそう信じた。どちらもウソがばれて、いづれ民衆から見放されるのでは」イエスが期待半分と言うと、そんな樂觀的性善説にマリアが反論して「そうかねえ、人間は自分の信念を通すより偉そうなやつ言うことを聞くようにできてんだよ」と言い返した。

「たしかに、そういう面もありますけど。大体あの二人は何なんですか？ どうして僕の弟子の偽者が二人も出て来て、嘘八百を並べ立てているのでしょう？」

エルサレム派とローマが、それぞれ何を狙っているのか、神様にはわかっていた。エルサレムは、それまでの強引な宗教統治の一角が切り崩されたのを繕いたいだけだ。イエスになびいた反乱分子を、元の鞘に戻すとまでは行かなくても、穏健な分派として体制内に再び抱え込みたいのだ。

一方ローマは、この際、イエスの宗教を大々的に布教して勢力を伸ばし、丸ごとローマに飲み込む計画のようだ。そのためにイエスの宗教を国教に据えることまで予定していた。エルサレム一派より遙かに広大な野望だが、実際のところ、統治がうまく行つて領土拡大が出来るなら、どんな宗教でもいい。宗教は政治の道具でしかないのだから。

神様はローマ政庁の奥深くにある小部屋の様子をタブレットに出してイエスに見せた。宗教管理局と書かれた部屋の隅に局長として座っていたのは、なんとベンダサンの手代、イエス逮捕のきっかけを作ったあの男だ。

「あつ、この人知ってます。ベンダサンの三番番頭です」イエスは驚いた。「どうして彼がローマ政庁にいるんですか」

「そういうことだよ。もつと驚くかもしれないけど、エルサレム派の指導部にはベンダサンの二番番頭が入って拡大部長をやっている。だからこれ、全部ベンダサンのシナリオなんだ」

今度はエルサレムの神殿内を映して見せた。モサドと書かれた薄暗い部屋の中央に二番番頭が座り、目付きの悪い役人たちを取り仕切っていた。

「ますますワケがわかりません。僕の主張を排斥したいのなら、イエスの偽弟子は一人でもいいでしょう。両方の陣営にベンダサンがいるなら、なおさらのこと……あつ、そうか、もしかして、わかってきました」

「それ多分正解だな。転んでもただじゃ起きないのがベンダサン、ていうか人間。エルサレム派もローマも、それぞれ本気で戦ってるつもりだろうけど、実のところベンダサンに手玉に取られてるだけのことだ。ベンダサンは成り行きを見計らって、一番儲かりそうなときに、儲かりそうな方を勝たせるのさ。ついでにイエスの教えも抹殺できるオマケ付き」

「ベンダサンで頭いいですね」

「頭いいのは認めなきゃならんけど、それを世の中のために使わないのがベンダサンだ」

「僕は悔しいです。ここに座って見てるだけなんて。なんだか再臨したくなってきました。ナザレに戻って、『あの二人は二セモノですよ』って叫びたい気分です」

「残念だが、もう遅い。今出て行けば君が二セモノ扱いされる。イエスの教えと違うことを言ってるってね。エルサレムとローマのどっちに捕まっても、もう一度公開処刑されるだろうよ。今度は穴掘っていないだろうから、本当に死んじまう」

「僕が僕の教えと違うことを言うって、どうしてそういうことになるのかな」

「それだけ君が偉大なことをしたっていう証拠だろう。正しいことを大声で言ったからインパクトが強すぎたんだ。民衆にも権力にもね。君が言ったことを全面否定したり、抹殺するのは出来っこない。だからエルサレムもローマも、民衆に気付かれないようにイエスの言葉を少しずつ変えて、洗脳されかけた民衆を体制の内部に、もう一度逆洗脳して取り込もうとしてるわけ」

聞いていたマリヤが言った。「ちよつと神様、あらんたいつから、そんなに洞察力が良くなったの」

「あはは、やっぱ不自然だった？ これ全部タイガたち情報部の分析。それとテレパシーの見解も入ってる。俺が考えたのは、人間ってどうしょーもないな、ってことだけ」

「全然考えてないじゃん。この程度の神様が作った世界なんだから、世界がアホなのも仕方ないね」

「まあ、そう言うな。完璧な世界なんて面白くもおかしくも、かわいくもない」

「えつと、神様」イエスが何か思い出したようだ。「僕と一緒にいた使徒たちはどうなったんでしょう。ユダがベツレヘムで無事にいるのは知ってますけど、あとの十一人はどこで何をしているのか」

「うん、みんな元気だよ。全員ベンダサンの別荘で、悠々自適で執筆に励んでる。使徒伝つていうのを」

神様は十一枚の画像を次々と映して見せた。イエスにとつて、どれも懐かしい顔だ。別れてからまだひと月も経っていないのに、十年ぶりのような気がした。

十一人は例外なく太っていた。顔色も良く、清潔で美しい服を着ている。山荘風の建物でそれぞれが快適な個室を与えられ、立派な机に向かって、なに

やら書き物をしていた。蜂型カメラがそつと近づき、医者のイエスが書いている紙を映した。

『師曰く、殺してはならないとは言わない。ただ、自分より弱いものを殺せば、それは強欲のなせる業であり、いずれすべての人間を敵に回すことになる。盗んではならぬとは言わない。ただ、自分より貧しいものから盗む人間は、あなたが考えるより千倍も強欲である。云々』

ちゃんと書いてくれている。これで少しは言葉を残せるだろう、とイエスは安心した。

別の部屋では大工のイエスが、筆先を舐めながら懸命に文章を作っていた。

『如是我聞。食えない以上に蓄えたつて、ちつとも偉くない。蓄えた食糧の上で威張つて暮らしていれば、いずれ食料は腐り、ウンチの上で生きてるのと同じこと。等々』

表現は少し違うが、大工がそう理解しているなら仕方ない。とりあえず本質は合っている。

しばらく見ていると、使徒が羊皮紙を一枚書き上げるたびに、下男風の男がそれを隣室に持つて行くことがわかった。そこにはラビとローマの文官がい

て、使徒の文章を細かくチェックし、血のような赤インクで片端から書き換えていた。

「あの二人は何をやっているんでしようか。僕の言葉がどんどん変わつて行く。赤インクの校閲は誤解や曲解ではない。換骨奪胎からも程遠い悪意の改変だ。ああ、神様」

「あのなあ、歴史つて常に権力のものなんだ。イエスっていう人がいたつてことだけでも残ればいいじゃないの」神様は慰めたつもりだった。

「名前だけなら残さないほうがいい」イエスは泣き顔になっていた。

イエスは迎賓館に二ヶ月ほど滞在した後、いつまでも世話にはなれないと、自分で建てた小さな庵に引っ越した。彼は河南寺の三匹からもらった般若心経にずっぽりはまつて、修行僧といつても話ができるように、河南寺のすぐ近くに庵を建てたのだ。

多くの人たちに自分の考えを話すのも大切だが、もしかするとそれ以上に、自分自身の内側を掘り下げるのも重要ではないか。イエスは、神の子としての自分が、どのように存在しているのか、さらに、

自分と自分の意識が他者とどんな関係にあるのか、

根源的などころから問い直し始めた。般若心経など読んだのがいけないのだ。しかし時として、タブレットで人間世界を見るにつけ、世に行なわれる悪行の増殖を放置し、自身の内面にだけ沈潜している自分が、無力にも腹立たしくも思えるのだった。このままでもいいのか。たとえ殺されても、今こそ再臨すべきではないか。悩みは深まるばかりだ。その点、河南寺の三匹は、もう少しポップに天竺教を探索している。悲壮感など皆無のようだ。やはりネコと人間は違うのかもしれない。

「自分が生きてるつてことを大前提にするしかないけど、それつて傲慢だよ。この世の存在の根源は、一体どこにあると思う？」カインがイエスに訊いた。「自分が存在するかどうかとか、目に見えるものや手でさわれるものの存在を疑つたら、ただ感じられるだけのものなんか、もっと疑わしいことになる。それじゃ何も信じられないから、疑つちゃだめなんだ」イエスが答えた。

「ほら、盲目的な決め付けに走ろうとしてる。古い宗教のパラダイムから抜け出せてない」アベルがイ

エスをいじめる。

こんなような楽しい堂々巡りを、三匹と一人は毎日続けていた。ヒマでなければ宗教はできない。

ところで、華南寺前の通りにイエスの庵という宗教施設がもう一軒できたことから、いつしか動物たちはこの通りを『寺町通り』と呼ぶようになった。七のつく日は縁日で、昼夜を問わず動物たちが集まり、物々交換したりタブレット用のファイルをコピーしたり、鳥たちの鳴声コンクールで盛り上がり、ゴリラのドラミング合戦は四方の山にこだました。

少数派の人間もやつて来た。ノアの一族だ。彼らは救護所を担当して動物たちから健康相談を受け、薬草の知識を教えたりした。

同じ人間のイエスがノアの家族と親しくなったのは当然のことだ。歳が近いノアの子どもたちとは特に仲良くなり、サルたちにもらった密造酒をいっしょに飲んで、ベツレヘムやナザレの思い出話を、夜が更けて朝になるまで続けた。故郷を捨てた者どうし、やはり心の奥には望郷の念があつたのだ。

一年ほど経ったとき、ノアが末娘を連れて来た。元氣でかわいい子だ。質素だが清潔な身なりで、あ

ちこち歩き回る姿は天使のように見えた。イエスは久しぶりに見る赤ん坊に目を奪われ、思わず抱き上げながらノアにその子の名前を尋ねた。

「アンナといいます。神さまが付けてくれました」
ノアは微笑みながら答えた。

イエスは「アンナ」と聞いて地面が回転したように感じ、落とさないように赤ん坊をしっかりと抱きしめた。

「ね、言った通りになった。エルサレム派の劣勢は隠しようがない。形勢逆転は望めませんね」

少し前からテレパシーはローマの勝利を予言していた。いまやエルサレム派の自称一番弟子が、どんなに派手な布教大会を開いても、参加者の激減は目を覆うばかりだ。旗や幟も減り、エルサレムが動員したスクラばかりが目立った。スクラたちは最初から酔っ払っていたのですからわかった。一方、ローマの一番弟子の人氣は、布教していたころのイエスを凌ぐ勢いだ。数百人の兵隊に警護され、特注の馬車でパレードすれば、周囲からはやんやの喝采と大量の金貨が降りそそいだ。一番弟子の一言ごとに観

衆はどよめき、気を惹くために焼身自殺する者、全財産をカネに換えて寄進する者が後を絶たない。

「おんなじようなこと言ってるのに、この違いはなんだろな？」神様には理由がわからなかった。

「つまり、民心の操作です。いろんな仕掛けで正当性、崇高性を、文化のレベルで刷り込んでいくわけですよ。理論や事実関係ではまるっきりアホな話でも、文化となれば否定しようがないです。まあ簡単に言えば、でっち上げた『既成事実』を、昔からそうだったように共通認識化するってことで」

「もつと難しいじゃん。結局なんなのさ」

「形而上的説明は無理ですか。んじや、あのパレードで、一番弟子の後ろに立ててある絵を見てくださーい」

ズームしてよく見ると、上品で少し色っぽい白人の娘が、丸々太った赤ん坊を抱いて微笑む絵だとわかった。赤ん坊は人間型の天使が乱舞している上空を指差している。

「紙おむつか粉ミルクの宣伝だろう」

「そんなわけないでしょ。生まれたばかりのイエスを抱いたマリアですよ」

マリアの感激

マリアことイヴは、イエスは昇天しただけで死んだとは思っていない。いつか帰ってくると信じながらベツレヘムでショービジネスを続け、今ではイエス劇場の総監督という立場になっていた。夫のヨセフことアダムはセールスプロモーションを担当し、特別公演をブッキングしたり、観劇ツアーを組んで遠方の客を呼んだりしていた。最近評判が良いのは新作の『髑髏ヶ丘の場』で、最終公演の後に特別追加料金を取って観せる一幕。もちろんイエス昇天の再現だ。終演が夜中になるため、世間ではミッドナイトクロスとも呼ばれた。

「自分の子どもの死に様まで芝居にして」などと陰口を叩く人も多かった。しかしヨセフは、「うちのガキは死んじやいない。そのうち天国の金銀財宝を持って、雲に乗って降りてくる」と相手にしなかった。

そんなある日、庭で洗濯をしていたマリアを黒服

の男が訪ねてきた。

「神の子イエスのご生家はこちらでよろしいか」言葉は丁寧だが、見下したような尊大な態度だ。

「そうだよ。イエスはすぐ隣の馬小屋で生まれたのさ。見るかい？」マリアが答えた。

「なるほど。それではお女中、ローマから皇帝の使者が参上したと奥様に伝えなさい」

お女中と言われてマリアはブツツと切れた。

「ローマだかどこだか知らないけど、相手を見てものを言いな、この田舎っぺ」

「おや、これはこれは。ハシタの無知な下働き女中にしても許せぬ言い草。私を誰と心得る」

「あんたが誰か？ 一目でわからあ。皇帝とやらの権威をカサに着た木っ端役人かなんだろ」

「失敬な」

「失敬なのはどっちだよ。アポも取らずにのこの勝手に来て、名前も言わずに奥様に会わせろなんて、失敬より非常識だ。それにあんた、奥様の顔も知らないんだろ」

「ご尊顔は存じぬが、お目にかかれればすぐにわかる」

「へええ、その節穴で」

などと言いつついると、家の中からヨセフが、「おい、なんかモメてるのか？」と声をかけ、顔を窓からのぞかせた。

「下男は引つ込んでいなさい」ローマの使者は面倒臭そうに言った。

「この野郎、誰が下男だ？ この俺か？ そこを動くなよ」ヨセフは飛び出してきた。

「お女中、あの馬鹿者をとめなさい。私に触れると命はないぞ」使者は逃げ腰になった。

「とおちゃん、縄もつといで。とりあえずふん縛つてやろう」

ローマの使者は後ろも見ずに逃げ出した。逃げながら「お前ら、ただで済むと思うな。皇帝が許してもイエスが許さない」と、わけのわからない捨て台詞を叫んだ。

しばらくして、別の来客があつた。なんとイザヤベンダサンその人がやって来たのだ。ロードス菓のイザヤではなく二代目だ。

「どうやら先刻、無礼な弁護士がご迷惑をお掛けしたようだ。代わりに謝ります。あの者は心底から悪い人間ではありません。ちよつと口の利き方を知ら

ただけ」

「そうだよ、なつてないよ。親の躰が悪いとあななるんだ」マリアはイザヤを客間に通した。「だけど、どうしてあんたがローマの代わりに謝るのさ」

「いやいや、細かいことはどうでもよい。やつ用の向きを、お二人にはぜひ知っておいていただきたいのでな」

「まあね、用があるから来たんだろうが」

「さすがに聖母、察しが早いですな」

「聖母？ 誰があ？」

「マリアさん、あんただよ。このたびローマではイエスの宗教を正式に国の宗教に定めてな。それで、『聖人』というカテゴリーを作り、生きている人間でありながら極めて神に近い、いや、神そのものともいえる人物をランキングすることになってだね、いわば生き神様なんだが、第一号はイエスに決まり、第二号には、イエスを産んだ人、いわゆる聖母、つまりあんたが選ばれた次第で、それを伝えに来たのが、あの使者でな」

「ちよつと待つてよ。あたしが何だつて？」

「現人神です」

「類人猿？」

「いえ、アラヒトガミと読む。人であつて神、神であつて人」

「やだね、そんなもん。親の七光りつて言うのは聞くけど、子どもの七光りで神になるなんて、冗談じゃない。ローマはおかしいよ、母親だからって、どうして神なのさ。変だと思って反対したヤツはいなかったのかい？」

「いや、喧々諤々の議論があつたようで、特にネストリウス一派が大反対で、反対しすぎて支那に追放されたそうさ」

「あらま、良識を支那に蹴り出しちまったんだ。ご愁傷様なこつた」

「それでは、聖母の尊称を受けていただいたとして、次のお願いに移ります」

「移っちゃだめだよ。訊きたいことがある。もしあたしが聖母とやらになったら、どんな得があるのさ。生涯免税とか、年金か恩給が付くとか」

「それはその、聖人というのは名誉職の見本みたいなものだからして、いわば殿堂入りしたようなものなので、これといった実利はない」

「あほくさ。そんなもん要らないよ。大体こんな話、天下のベンダサンが持つてくるかね。カネにならなきゃ意味がないっていうのは、あんたが一番知ってるだろうが」

「だから次のお願いになる」まだ悪態をつこうとしているマリアを制してイザヤは続けた。「ま、黙つて聞きなさい。ローマは、あんたの肖像権を買いたがつておる。聖母マリアの肖像権を喉から手が出るほど欲しいらしくてな。わしは他人の足元を見るのが得意だからして、五百万タラント払うと約束させた。どうだ、すごい大金だろ。売らんか？」

「五百万タラント？ あたしに払うつて？ ホントならすごいけど、いや、やめた。危ない危ない。どうせ来年の納税時期になったら、税額五百万タラントの納付書がくるんだろ」

「それはない。無税だよ。税金として取り戻そうなんて、そんな姑息なことはさせない」

「本当かい？ ま、世界一姑息なあんたが言うんだから信じてもいいかなあ」

「嬉しいね。わしが世界一姑息なんて、面と向かつて言つてくれるのはあんたとヨセフだけだ」

「あたしらは正直だからね。それで、何を売るんだっけ」

「肖像権という権利だ。あんたと、生まれたばかりのときのイエスも込みで」

「どうすりゃいいのさ。権利なんて売り買いしたことはないから」

「簡単だよ。わしが用意してきた書類に、あんたがサインすればいい。ああ、イエスの分は、なにせ赤ん坊時代のことだから、母親のあんたが了承すれば済む」 イザヤは懷から羊皮紙を取り出した。「ほれ、この書類。ちゃんと作ってきた」

「相変わらず手回しのいいことで。たしか藁のときも、この手でヨセフがやられたんだよね」

「そんな先代の話は知らん。サインしてくれれば、すぐに五百万タラントの小切手を届けよう」

「信じらんないくらい美味しい話だね。サインしてもいいけどさ。それで、もしあたしがサインしたらローマにどんな得があるんだい？」

「あんたたちに不利になることは何も無い。イエス劇場での公演も今まで通りに続けられるし、あんたが聖母として活躍するのも世の中に出るのも自由

だ。この紙に『肖像権元所有者が継続して持つ諸権利』という特記事項で書いておいた」

「そんなの当たり前だろ。聖母はあたし一人だから、誰も代わりになれっこない。あたしに不利があっちゃ困るよ。そうじゃなくて、ローマはどうするかって訊いてるんだ」

「そうさなあ、いろいろ考えられるが、まず最初に聖母子像の彫刻や絵を大量に作るだろう。あんたが赤ん坊のイエスを抱いているところだ」

「えっ、あたしの絵や彫刻が世の中に大量に出回るのかい？」

「そうだ。あんたはすぐにスーパースターになる。間違いないね」

「あたしが？ スター？ すごい。っていうことは、イエス劇場で聖母シヨもできる」

「もちろんさ。大入り満員、連日札止めだ。大入り袋はベンダサン商会から買ってほしいね」

「ああ、明日にでも一万枚注文するよ。こんなにいい話、どうしてもっと早く持ってこなかったのさ」

「申し訳ない。わしも忙しくてな。それじゃ、ここにサインして」

イザヤは羊皮紙とペンを出した。マリアは中身なぞ読まずにサインした。

「はい、めでたしめでたし。ところでマリアさん、もう五百万タラント儲けないか？ いや、危ない話ではないよ」

スター誕生に心浮かれていたマリアだが、もう五百万の言葉に、いくらか我に返った。

「え、まだあるの。次は何を売ればいいのかな」

「売るのではない。思い出してほしいのだ」

「思い出して、何か証言でもする？」

「そんな面倒なことではない。ただ思い出せばいい。ある少年、ペテロのことだよ。ほら、イエスと同一年で、よく二人で遊んでおったろう。イエスにはケファとも呼ばれておった。たしか、知り合った場所はボート池じゃなかったかな」

「なんだい、その話。ペテロ？ ケファ？ 知らないね、そんなガキ」

「だから、思い出してほしいんだ。思い出してくれれば五百万タラント。なあ、そうだったろ？ イエスとペテロは、いわゆる竹馬の友っていうやつで、まるで双子のように一緒にいただろ？ 違うか？ 勉強

強するのめいたずらするのめ一緒、二人とも天才だから、三歳くらいから神学論争やつていなかったか？ どうだ、思い出したか」

「思い出せば五百万かい？」

「無理に思い出すことはないんだ。思い出せなきゃ、これはなかった話で」

「待つてよ。いくらか記憶が戻ってきた。そういえば、いたいた、ペテロっていうガキ」

「そう。いたんだよ。どうも大人になると世事にかまけて昔のことを度忘れするもんだ。お互い歳はとりたくないな。はっはっは」

「ところでペテロって何者なのさ」

「おう、そうか。幼い時分のことしか憶えていないか。ペテロはイエスが家出したときも一緒だった。二人で荒野で修行をして、それから布教の旅でもイエスを支えた。一番弟子だからな。髑髏ヶ丘でイエスを看取ったのもペテロだ」

「イエスは死んじやいないよ」

「これは失礼した。昇天しただけだったな。なにしろペテロは、誰しもが認めるイエスの一番弟子で、イエスの正当な後継者なんだから」

「ふーん、そうかい。あたしが気になるのは自分の子だけ。子どもにどんな友達がいようと、そんなのどうだっていいさ」

「マリアさんは偉い親だね。子どもといえど別人格。親は過度な干渉をするものではない。それがわかっている。素晴らしい親だ。ところで、ペテロがイエスの友達だったことを完全に思い出したかな？」

「ああ、思い出した。まるで昨日のこのように思い出した。五百万だからね」

「そうこなくちゃ。この分の小切手も後で届けさせよう。それではわしはローマとの通信があるので、この辺で失礼するよ」

しばらくして、ベンダサンの番頭が二枚の小切手を届けてきた。五百万タラントが二枚、合計で一千万タラント。マリアは何度も何度も金額を確認、小切手を胸に抱いて家中を飛び回った。

カネさえ手に入れば他の事はどうでもいい。しかもすごい大金だ。これで何を買おうか、いろいろ想像してみた。世の中のものは何でも買える。南の島でも買って王国にするのはどうだろう。あたしが女

王でアダムは公爵か何か。法律はあたしが作る。とても名案に思えた。

カナンで、イエスはすべてを見ていた。

「母には昔から、こういつた側面がありました。嬉しくなると周囲が見えなくなるんです。純情といえど純情ですけど、もう少し思慮があっても」

肖像権はローマに売ったはずなのに小切手はベンダサンから、ペテロを思い出した謝礼もベンダサンの小切手。イザヤが何かたくらんでいるのはミエミエなのに、マリアは全然気付いていない。

「アダムとイブ、いやヨセフとマリアは最初からそうだったよ。頭は悪くないんだが、欲望にやたらと忠実すぎるんだ。あの一千万タラントで何を買うんだろう。くだらないものに使い果たさなければいいけどね」神様にも先は読めなかった。

マリアの買い物

マリアはヨセフに大金が手に入ったことを伝えたが、金額は二百万タラントにしておいた。どうせ、少し寄越せと言われて半分くらいは持つて行かれるのだから、正直に言うことはない。百万だって多すぎるけど、あの人もこれまで多少の苦労はしたんだから、この際いいか、と思った。

百万タラント減ったところで、マリアには何倍にもして取り戻す算段があった。劇場で『聖母マリアショー』を上演するのだ。肖像権を買ったローマが買っぱなしにするはずはない。近々、マリアの肖像画を国中に溢れさせるに決まっている。聖人のマリア、聖母マリア、あたしの顔が国中に知れ渡る。まるでスターじゃないの。それだけでも楽しいけれど、これを金儲けに使わない手はない。そこで思い付いたのが、聖母自身が出演する聖母マリアショーだ。髑髏ヶ丘の芝居より、ずっと受けること間違いなし。なにしろ本人生出演なんだから。

一幕二場の構成にしたいな。第一場は受胎告知か

ら始まってイエス誕生までの『歓喜のマリア』、第二場はイエスが荒野に出かけたところから髑髏ヶ丘で昇天するまでの『悲嘆のマリア』。オペラと言いたいところだけれど、それほど歌に自信はないからオペレッタでいいや。五十人規模の混声合唱団をバックにして、適当な吟遊詩人にリラを弾かせて狂言回しをさせよう。必ず後世に残る名作になるよ。

第一場と第二場では衣装を変えなくちゃ。どんなのがいいだろう。控え目で厳かで、しかも人目を惹く衣装って、やっぱりラメを散りばめたほうがいいのかな。マリアは大急ぎでデザイン画を何枚も描いた。頭の中では、すでにステージに立ち、大喝采を浴びていた。

何日かして、街道でイエス後継者のパレードがあるという予告が街角に貼り出された。マリアは芝居の準備で忙しかったが、イザヤに『思い出した』と約束したペテロなる人物を一目見たくて、朝早くから道端で場所取りをして最前列に座り込んだ。

行列はエルサレムの方から肅々と、そしてド派手にやって来た。先行する何人かのピエロが見物人にアメやポップコーンを配り、ついでに聖母マリアの

肖像チラシを手渡して回った。

何よこれ！マリアは目を疑った。全然あたしじゃない！人種からして違う。うら若い上品な白人の女性が、柔らかに微笑んで赤ん坊を抱いている。周りには天使が舞い、床には飼い葉桶があった。そして、ご丁寧にも「イエス生誕時の聖母とひとり子」と説明が付いていた。

この他、「受胎告知のマリア」「イエスを崇めるマリア」「神の姿を見るマリア」など何種類かのチラシがあつて、どれも聖母は白人の美女だ。

クソつたれ、肖像権は売ったけど嘘ついていいとは言つてない。イザヤのじじい、絞め殺してやろうか。これじゃあたしは有名になれない。それに一体、聖母に化けてるこの女は誰なのさ。

いつしかパレードはマリアの前に差しかかった。後継者なる若者は十六頭立ての金銀細工を散りばめた馬車に乗り、左右の観衆に悠然と微笑んでいた。そして、マリアのまん前で、マリアの殺人的な憤怒の視線を感じたかのように馬車は静かに止まった。後継者ペテロは玉座のような大仰な椅子からゆっくりと立ち上がって観衆を見渡し、にこやかに手を

振った。

あつ、あのガキはヨタだよ。下足番爺さんの息子のヨタ。何度かイエスの代役をさせたことがあったつけ。大根役者のヨタだ。あんな低脳があたしの息子と竹馬の友なんかであるもんか。ついこの前まで鼻水垂らしてリンゴの芯だけかじつてた貧民だ。一番弟子だど？笑わせるんじゃないよ。足し算も満足にできないだろうに。

ペテロことヨタは観衆を手で鎮め、低い声で話し始めた。

「おお、わが故郷ベツレヘム。わが父母の地ベツレヘム。そしてなによりわが師、神の子イエス生誕の地ベツレヘム。今こそ祝福を。祝福を。出迎えてくれた観衆ひとりひとりにも大いなる祝福を」

見物人たちはひれ伏し、祝福を少しでも多く受けようとした。マリアだけがヨタを睨みつけて立っていたが完全に無視された。

「わが友であり師でもあるイエスとともに、これまでの長い年月、神の教えを広める茨の道を歩んできた。そして今まさに、大歓声を受けつつ帰郷したのだ。生還できたのは神のご意志以外の何物でもない。

主の奇跡を褒めたたえよ」

馬鹿言つてんじゃないよ。どこの演劇学校で芝居の発声習つたんだ。この大根野郎が。

そのとき、大群衆の後ろから、「ペテロ、私のペテロ！」と叫ぶ声が聞こえ、全観衆は一斉に声の主を探した。純白ドレスに銀の刺繍をゴテゴテ付けた女が、両手を前に差し伸べながら走り出て来た。警護の兵隊は彼女を押し留めるのではなく、逆に馬車に近付く道を作るために観衆を押し分けた。

「あつ、聖母マリア様」ペテロが叫ぶと観衆は大きくどよめき、「聖母だ」「聖母様だ」と口々に言い合つた。

聖母だと？マリアは混乱しながらも悪趣味なドレスの女の顔をよく見た。たしかにビラに描かれている女だ。あいつが聖母？ニセモノだよ。本物はここにいる！それにしても、どこかで見た顔だ。そうだ、あいつだ。劇場で聖母役に雇ってやったことがある、たしかにあの女だ。ひと月もしないうちにヨセフと浮気しやがつて、唐傘一本持たせて追い出した、あのビッチじゃないか。

道の真ん中ではニセ後継者とニセ聖母の臭い芝居

が続いていた。ペテロはイエスの最後を感動的に語り、ニセ聖母は大袈裟に身をよじつて泣く。マリアが周囲を見渡すと、観衆も全員が泣いていた。

「これはやりすぎではないですか。母さんがあまりに可哀想だ」イエスにしては珍しく怒っていた。「やはり再臨して、ペテロなんて知らない、僕の母はこの人ではない。本物のマリアはこっちです、って言いたい。神様、だめでしょうか？」

「もう遅いよ。大衆がいったん思い込んでしまったら、それを覆すには千倍の力が必要。だから先手必勝、ウソでも大声で言えば真実になるんだ。これはベンダサンのシナリオだろうね。ローマには考え付かない」

「悔しいなあ。ああ、荒野で修行なんかしなければよかった。劇場で神の子役を続けていればよかった。そういった平凡な暮らしでも、小さな幸せはあったろうに。今の不条理を思えば、小さな幸せが遥か遠くに思える」

「あのさあ、劇場で神の子やつてるのは、ちっとも平凡じゃないと思うよ」ネコのマリアが呆れて言っ

た。「あんたたちの話は、やっぱり神がかつてる」

「マリアさん、あんたがローマの弁護士を追い返したのが悪い。あいつは弁護士が本業だが、腕のいい写真師でもあってな、肖像権の契約が締結された後で、聖母マリアの写真を撮って帰る予定だったのだ。その写真をもとにポスターやらチラシやら壁画を描く手はずになっておった。まあ多少の修正はするだろうが、そうすればマリアさんの姿が聖母マリアになったはずなのだ」

「じゃ、あたしが悪いって言うのかい」

「そういうことになるな。ローマの立場も考えてごらん。写真もスケッチも無いから想像で聖母像を描くしかないだろう。そのときちょうど、ベツレヘムの劇場でマリア役をやっていたという女性が現れて、ローマとしては藁にもすがる思いで彼女をモデルにしたということだ。まったく致し方ないことだろう。納得したかね」

「藁にもすがるか？ イザヤが藁って言うのとロクなことはない。あたしは今度の一件で顔売って、あたしが主演する大入り満員の芝居興行で一儲けするつも

りだったんだ。あんな白人が聖母だなんて、まるで計画が狂っちゃった」

「まあまあ、いいではないか。マリアさん、世の中に顔など売れないほうがいい。有名になればプライバシーさえなくなる。それに、もう充分儲けたろう。まだ儲けたいなんて強欲だ」

「あんたから強欲だなんて、それだけは絶対言われたくない」

イザヤの事務所でマリアはわめいていた。どこかにケツを持ち込まないと収まりが付かず、とりあえずベンダサン商会に怒鳴り込んだのだ。

「いや、わしは生粋の商人で、あんたは芸術家だ。商人は泥の中の一ドラクマでも這いずって探すが、芸術家に金銭欲は似合わないよ」

「芸術家？ あたしが？」

「そうだよ。舞台芸術という立派な創造活動をしているではないか。世界文化のための崇高な仕事だ」

「ま、一応そうだけど。世界のためにか文化とか、あんまり考えたことなかったなあ」

「またまたご謙遜を。あのような素晴らしい舞台はディレクターが全身全霊をかけ、命を削り、心血を

注がねば完成しない。あなたがたご夫妻は長年にわたって血の滲むような努力をされてきたはずじゃ。わしにはとても真似できない。まさに芸術家以外の何物でもないだろう。それなのにカネが欲しいなどと俗物のふりをしてちっとも偉ぶらない。いやあ、本当に素晴らしい人たちだと常々感心しておったのだよ」

「あら、それほどでもないけど、やっぱり見破られてた？ あたしたち夫婦が芸術家だって」「もちろんだとも。そうでなければ大衆演劇は田舎芝居になり下がってしまう。芸術家が緻密な演出をしたからこそ、イエス生誕劇は、時代を経た今でも神々しいのではないかね」

「そうも言えるなあ。うん、そういうことだよ」「やっとわかってくれたようだ。ところでマリアさん。先日の一千万タラントの使い途は考えたかね？」

「いろいろと。でもあんまり大金すぎて、いっそ島でも買おうかなんて馬鹿なこと考えてるよ。夢みたいな話だけだね」

「おう、わしもそう思っておった。夢ではないぞ。つい昨日だが、ローマから領土拡大の依頼があつて

な。まだ登記さえされていない広大な土地が眠っているのだが、いっそ買う気はないかね」

イザヤは柵から地図を取り出し、机に広げた。

「この一帯だ。カナンと呼ばれている。ここからは少し遠くて、ルビコン川の向こうだが、まったくの手付かずの処女地で、ローマは千五百万タラントで売ると言っている。わしが五百万出そう。二人でここを開拓して新天地を作り、あわよくば大儲けしないか？」

その日の夜、マリアはイザヤ土地開発という会社とジョイントヴェンチャーの契約を交わした。マリアにはわかつていた。カナンとは自分が作られた場所、餌殿があつた土地だ。うまく行けば神様を名乗ったネコに会えるだろう。今度会ったら袋に入れて蹴飛ばしてポコポコにしてやる。

迷い牛チャーリー

「いつ覚醒するか決まっていんです。一瞬でシラフになって、またすぐ呆けちゃうんですから、話を聞くには待ってるしかありません」

ホテル・シオンの前で、牧羊犬のダニエルは茶色い牛の横に座って困っていた。見守る神様も、ただ困っただけで座っていた。

「ぜひとも話を聞きたいけど、この炎天下で牛と睨めっこしてるのはあまり生産的じゃない。それより俺は、ここに座つてると熱中症になりそうだ」

「ねえ、入つてもらつたらどう？」マリアが見かねて声をかけた。

「いいんですか、こんな大きな牛をホテルに入れて」「それしかないでしょ。牛が覚醒したとき神様が脱水したら、今度は牛が待たなきゃならないから」

牛と犬がロビーに入ると、ネコ用のロビーはさすがに狭苦しかった。でも道端にいるよりずっといい。

「これで落ち着いた。さて、君たちはどこから来たの？」飾り棚の二段目に寝転がった神様が訊いた。

だった。

ダニエルが子犬のころ、牛といえば牧草地にいて草を食っているか、畑で人間の手伝いをしていた。たまには殺されて人間に食われる運のない牛もいたが、それでも前日まで牧草地でゆったりと暮らしていた。

変化はたった五年ほどで起きた。最初、なにやら機械仕掛けで動く『鉄の牛』が現れ、人間の手伝いを始めた。そいつらは道を走って荷物も運んだ。ダニエルは喜び、これで牛が重労働から開放されると思ったが甘かった。牛たちは乳を出すことと食用にされることに専念させられるようになった。牧場で優雅に暮らす牛はいなくなり、どの牛も狭い室内に押し込められて、牝牛は毎日乳を搾られ、雄牛は肉になるために早く成長するのが仕事になった。

それだけではない。これまでは牧場で勝手に繁殖していた牛だが、人工授精なるものでしか増えられなくなった。子作りまで人間がコントロールし始めたのだ。つまり、牛乳が必要な分だけ牝牛を誕生させ、都市部の人間が食う分だけ雄牛を産ませる。

ダニエルの主人はこんな変化を当然と思っている

「はい、川の向こうから来ました。いわゆる脱北者です。この牛はチャーリーといいます。僕はダニエル。川向こうのゴードン畜産から逃げて来ました」

「脱走だけじゃなくて川まで渡ったとは、よほど切羽詰った事情があったんだろうね」

「はい、もう訴える先は神様しかなかったんです。僕は犬だから飼い主に忠実にしようと精一杯努力しました。でももう限界です。これ以上我慢したら動物としてのアイデンティティーが崩壊しそうで」

「まあまあ。ここに来れば大丈夫だよ。ここは約束の地だ。誰も君たちの自由や幸福の邪魔をしない。君も牛のチャーリーも安心していいからね。ところで、牛はまだ覚醒しないのかな」

「はい、まったく予知不能です。こうして口をモグモグさせて、うつろな目つきでよだれを垂らしているのを見ると、ただのボケ牛にしか見えませんが、こうなったのは人間、いや産業構造のせいなんです。それを神様にわかっていただきたくて」

「どういうこと？ 牛が覚醒する前に概略だけでも話してくれる？」

犬のダニエルが神様に伝えたのは次のようなこと

ようだった。ダニエル自身は、子犬のころ牛と遊んでいたせいもあって、牛が全然違った生き物になった気がした。実際、牛との楽しい会話はなくなっていた。

牛だけかと思っていたら、ブタも鶏も同じような運命にだった。特に鶏は、地面の上を一度も歩かずに肉にされて食われる仕組みができて、もはや鶏ではなく産卵マシンが成長する肉塊としてしか扱われていない。

そんなことをする権利が人間のどこにあるのだ。人間が他の動物を食べるのは自然の摂理で、ネコがネズミを食べるのと同じだから咎められることではないが、ある動物から、その動物固有の習慣、知識、習性を奪って、人間の役に立つためだけの『動く生き物』にしてしまう権利を、一体人間は誰から与えたのか。

ダニエルは飼い主に訊いてみたかった。しかし飼い主には犬語がわからない。どうすればいいか考えるたびにダニエルは鬱々とした気分になった。当然口数は減り、動きも鈍くなった。すると飼い主が言った。「この犬は老いぼれた。もう役に立たない」

その言葉にダニエルは恐怖を感じた。乳が出なくなった牝牛が殺されて安い肉になるのを知っていたからだ。僕もネコのエサになるのかな。

「おいおい、ちよつと待て。ネコは犬など食わないよ」神様が言った。

「それは認識不足です。人間はどんな肉でも巧妙に加工します。腐った肉でも新鮮に見せる技術があります。犬の肉をネズミ肉に見せかけることなど朝飯前でしょう」

「それは偽装と言わんか？」

「いえ、加工です。すごく小さな字で『原料…犬肉』と書いておけばいいんです。だから怖かった。雄犬同士の喧嘩で名誉の最期を遂げるなら悔いはありません。でも殴り殺されてネコのエサじゃ、あの世でも泣くに泣けませんよ」

「人間のやりそうなこつた」

ダニエルは他の動物がどういう状態になっているのか調べるため、夜中に図書館に忍び込んで本を読んだ。一週間もかからずに全部わかった。どんな動物でも、一見野生動物であっても、人間が『生かそう』としない限り死ぬしかない、というか絶滅させ

られる運命なのだ。すべての動物の生死は人間の利害と気紛れにかかっている。人間が言っている『神』がいるなら、その神は、人間のこのような蛮行、増長、理不尽な優越を許しているのだろうか。

「神様、許しましたか？」ダニエルが訊いた。

「俺が？許してなんかいるもんか。人間に好き勝手やってもいいなんて言った憶えはないよ。でもなあ、実はその辺がちよつと微妙だね」

「ダニエルさん、それは訊いちゃいけないことなのよ」マリアは神様をかばおうとした。「その問題は神様の、たくさんある間違いのうちに最大の汚点なんだから」

牛のチャーリーは瞳が輝き始め、よだれも止まった。

「ありや、ここはどこですか？」チャーリーが周囲を見渡して首を振ると、口の周りのよだれが吹き飛び、ロビーはますます狭く感じられた。

「やつと覚醒したね」ダニエルが喜んだ。「ここはカナンだよ。ついにたどり着いたんだ。目の前にいるネコが神様で、隣はマリアさん」

「どーも、はじめまして、チャーリーです。ゴードン畜産から来た肉牛です。ときどきしか意識がハッキリしなくて、ご迷惑かけます」

「そんなこと気にしなくてもいい」神様はにこやかに応じた。

「そうよ、神様なんか、これまで一度もハッキリしたことないんだから」とマリア。

「うるさいなあ、あつち行けよ。まあそれにしても、ここまでたどり着いたからには心配要らない。ゆつくり養生すれば、いつもハッキリしてるか、いつもボーッしてるか、どっちかに落ち着くだろう」

「はい、ありがとうございます。でも私は、自分だけが助かりたいために来たんじゃないやありません。川の方こうでの動物の扱われ方が、まったくもって犯罪的なことを神様に直訴するために来たんです」

「俺に言いに来たの？どうしてここに俺みたいな神様がいてわかったの？」

「はい、それもお話します」

牛のチャーリーは語り始めた。

チャーリーが生まれて最初に見た景色の中に母牛はいなかった。ホースの先に付いた乳首から、いつ

でも飲み物が出た。それは中毒性があるようで、いくらでも飲む気になったし、飲むとすごく良い気分だった。同じ部屋には、他に何頭かの子どものおス牛がいた。その一頭のアルと、チャーリーは仲良くなった。アルは「こんなもん飲んでると馬鹿になる」と言っただけで、あまり飲まず、だから一番痩せていた。アルが言うには、これは牛乳でもなんでもなく、抗生物質と肥満促進剤と強力な精神安定剤で、牛に何も考えなくさせるものらしい。これで牛を生きたまま殺して、本当に殺されてもわからないようにするという。チャーリーは怖かったが、それでも良い気分になりたくて飲み物をたくさん飲んだ。

少し大きくなると別の部屋に移され、飲み物の代わりに粒々の混じった粉が食べ物になった。これはさらに強烈で、食べると良い気分を通り越して全身から力が抜け、空中に浮かんでいる幸福感があった。何かを考えるなんて、もうありえない話だ。食べ物消化されるとシラフに戻り、また空中に浮かびたくて食べる、それを繰り返した。そして、食べれば食べるほど体はむくむくと太った。

アルは同じ部屋にいたが、ほとんど食べないので、

相変わらず一番痩せていた。時々人間はアルを連れ出した。帰ってきたアルは、いつもその場に倒れて意識をなくした。注射というものをされたという。それでもアルは死なない程度にしか食べなかった。

牛としてのアイデンティティーを維持続けて死にたい。そうアルは言っていた。チャーリーには理解できなかったけれど、自分が牛であることだけはわかった。アルはまた、俺たち牛は、人間の経済システムの上にめられた、とも言った。これもわからなかった。でも、今の生き方が、どこもなく自然でないように感じ始めていた。

ある日、太った子牛だけが外に連れ出された。みんな粒々の粉エサで気持ち良くなっていて、とてもおとなしく出て行き、帰っては来なかった。子牛肉は高いからな、とアルは言った。

いくら粒々粉エサで鈍感になっけていても、チャーリーは気付いた。今朝まで一緒にいた牛たちは肉になったのだ。肉になるってどんな気分だろう。アルに訊くと『死んだんだよ』と答え、『もうすぐ目の前で見せてやる』とも言い、それからは死なない程度にも食べるのをやめてしまった。

「じゃ、この話が終わったら早速作ります」

チャーリーは幸運なのか不幸なのかわからなかった。ただ言えるのは、アルがいたから気付けたということ。もし彼がいなければ、生まれて、気持ち良くなって、自分が牛ということも知らないまま、そして死ぬとは何かもわからずに、ただ殺されていたに違いない。同じ部屋にいた多くの牛たちは、そんな風に一生を終えるのだろう。チャーリーは初めて怒りを感じ、同時に怖くなった。大きな体がネズミのように震えた。

その日から逃げ出すことを真剣に考え始めた。部屋の外がどうなっているのかわからない。別の部屋がもっとたくさんあるのだろうか。そのどれかには人間がいなくて、牛が牛として暮らせる部屋があるのかもしれない。外の世界を見たことがないので、そこまでしか想像できなかった。

なるべく気持ち良くなるエサは食べず、頭がハッキリしている時間を長くするようにした。しかし、これまで食べたエサの蓄積効果だろうか、急激に気持ち良くなってしまふのだ。それを必死に払いのけ

「なんか壮絶な話だなあ。そのゴードン畜産には、どのくらい牛がいるの？」神様が訊いた。

「数えられません。いっぱいいます」とチャーリー。

「多分、常に数万頭はいます」ダニエルが言った。

「それがみんな、最後には人間に食われるのか。まさに鬼畜の振る舞いだ」

「畜はやめてください。鬼だけにして。畜に罪はありません」ダニエルが抗議した。

「いや、ごめん。言葉のアヤだけど、悪かった」

アルが死んだ。無理な絶食を続けたからだ。チャーリーが呼びかけても、鼻先でつついてもアルは動かなかった。人間がアルを手押し車に乗せて運び出そうとした。チャーリーはアルの首の毛を少しむしり取り、口の中に隠した。

「神様、アルの毛をまだ持ってます。これでお墓を作ってもいいでしょうか」

「もちろんいいよ。ホテルの裏庭あたりがいいだろう。暇があったらいつでも花をあげられるから」

た半覚半睡の状態でチャーリーは夢を見た。見たこともない大地が広がっている。部屋ではなかった。地面は緑に覆われ、いろんな動物たちが自由に暮らし、真ん中には神様がいた。ぼんやりと真つ白にしか見えないけれど、それはたしかに神様で、チャーリーに『こっちにおいで』と呼びかけていた。夢の醒め際に、その場所は南の方にあるとたしかに感じた。

次に覚醒したとき、チャーリーは絶対に逃げると決心した。でも方法がわからない。見当も付かない。それまで気にもしなかったが、部屋の外には犬がいて、何かブツブツ独り言を言っていた。注意して聴くと、飼い主への忠誠心と憎悪の板挟みになって、やはりここから逃げ出したがっている。チャーリーはダニエルに話しかけてみた。

逃がしてくれないか。

ダニエルはチャーリーが覚醒するのを根気よく待ち、部屋の外の様子をいろいろ話してくれた。さすがにゴードン畜産の牧用犬だけあって、牛とは本来どういふものか、何を食るのが本当なのか、どう暮らすのが自然なのか、その他さまざまな牛の知識

を教えてくれた。チャーリーはますます外に出たくなった。暴れたら出してもらえるだろうか。ダニエルは、暴れたら注射を打たれるだけだと言った。

チャーリーが部屋から出される予定の日の前日、今夜やるよ、とダニエルが言った。今夜だけは必ず覚醒していなければ。

夜中にあちこちでサイレンが鳴り出し、天井から水と白い泡が降って来た。ダニエルが火災報知器を鳴らしたのだ。チャーリーはひとつしかない扉に突進しながら、他の牛にも逃げるように言ったが、どの一頭も立ち上がりさえせず、面倒だよ、と呟き、また眠ってしまった。

人間が扉を開けた瞬間、チャーリーは飛び出した。生まれてから走ったことはない。それでも、自分でも驚くほど速く走れた。いつの間にか白黒ブチの犬が隣を走っている。一匹と一頭は走り続け、日が昇るころには広い川の岸に着いた。

「草っぱらの真ん中で、チャーリーは『腹が減った』と言うんです。草が食べ物とは知らなかったんでしょう。仕方なく僕が食べて見せました。お陰で

何度も吐きましたよ」ダニエルは笑い話のつもりで言ったようだが、神様には笑えなかった。

その後、一頭と一匹は、化学工場のボートをかつばらって川に漕ぎ出し、漁に出ていたノアの息子に救助されたという。

「わかった。君たちの話は全部聴いた。しばらく休んでからカナンでの身の振り方を決めればいい。どうやら人間は、生命の尊厳を意図的に無視しているようだ。動植物を含めたすべてを自分たちの所有物と思っているのだろう」

「そういう評論家みたいなことを言うだけなら簡単だよ。それで神様、どうするのさ。今度こそちゃんと行動するんだろね」マリアは怒りをあらわに神様に詰め寄った。

「行動？ 世界がここまで救い難いドツボにはまってるのに、俺に何を期待するんだ」

マリアは椰子の実で作った黒いヘルメットを取り出し、神様に見せ付けるように被った。そして言った。

「全部ぶっ壊す！」

ローマ法王

ローマはエルサレム派を追いつめなかった。大人の判断というやつだろう。負けを認めた相手をさらに攻撃するのは労力の無駄。それより隷属させて甘い汁を吸うほうがいい。これはもちろんベンダサンの判断だ。どっちみちエルサレムの本部も、事実上ベンダサンが仕切っているのだから、二セ後継者で対立する前と事情はまったく変わっていない。

ローマはイエスの宗教を国教に指定し、首都の真ん中に法王庁を建ててやった。初代法王に就いたのは、もちろんペテロだ。法王庁印刷局は聖母子のポスターを数万枚印刷して手当たり次第に配った。十二使徒が書いたとするイエス伝も全集の形で出版され、ローマ市民の必読書に指定された。さらに第二印刷局という地下組織では、すべての罪が許される免罪符の発行も始まり、金持ちや罪深い神父に法外な値段で売りさばかれた。

一方エルサレムは、ローマに楯突いても負けるとわかった以上、当たらず触らず路線に切り替え、現

有勢力の温存を主眼に、全体の引き締めに転じた。つまり戒律の文字通りの厳守、民族の誇りの高揚、他宗教への表面的な寛容と本音での非寛容等々、多少無理はあったが民族と宗教の独自性を極端に押し出すことにしたのだ。それらは、政治や軍事では勝てないから、秘密結社の経済力で世界を圧倒しようという発想に基づいていた。

ローマもそれを認め、そもそも得意でない金勘定をエルサレム一派に任せることにした。これで両権力の顔が立ったわけだ。めでたしめでたし。

イブことマリアは、聖母が白人になってしまったからもスーパースターの夢を捨てがたく、ベツレヘムの劇場で聖母マリアショーの上演を強行した。結果は、マリア以外の誰もが予想したとおりで、やはり倒され笑い飛ばされてトマトや卵が投げ込まれ、第一幕だけで中止するしかなかった。マリアは観客に丸札を渡してとにかく帰らせしたが、その後一度も上演しなかったために丸札はただの紙切れになり、結局入場料は取りっぱなしにしてやった。これでマリアは少しだけ気分を良くした。

ベンダサンとのJ.Vの話は着々と進んでいた。イザヤ土地開発の担当者が毎日のように訪れ、計画図や主要建物のパースなどを見せた。マリアは、これ全部があたしのものだと思うと気が遠くなるほど嬉しくて何度も失神かけた。

計画では、まず本土とのフェリーが発着する大きな港ができる。周囲はもちろん港町で、怪しげな歓楽街になる。港から真南に大通りが延び、南の断崖まで続くが、断崖はいずれ切り崩してビーチになるという。大通りから西に折れるとアラファト山に登るケーブルカーがあつて、山頂にはマリアの別荘が建つ。パースでは建物全体が金色に輝き、まるで聖堂のように見えた。

大通りの両側には大型リゾート施設、ホテル、カジノ、競馬場、競輪場、豪華な娯楽館が軒を連ねる。その規模はバビロン以上だ。しかし、その他の多くの土地は、動物が住めるように開発されずに森林と原野のまま残され、全体が巨大なサファリエリアになる。どんな動物を一日に何頭仕留めても均一料金の殺し放題アトラクションゾーンだ。

イエスの考察

イエスは語った。

カナンに来て初めて本物の神様と出会った。ネコの形をして、性格もネコっぽい。決断力には少し欠けるが、そのほかは純粋に正しい神様だ。この世界や動物を作ったのも神様で、最初にネズミ、次にネコ、そして人間は最後に作られた予定外の生き物であり、これは動かし難い事実だ。

神様はすべての生き物は平等だと言う。自分がネコの形をしていても、ネコが偉いとは決して言わない。動物の尊厳は、種類にかかわらずみな同じなのだ。

神様は、すべてであるがまがが一番いいと言う。しかしそういった考えを他の動物に押し付けることはしない。押し付けたら「あるがまま」ではなくなると知っているからだ。

一方、僕もそうだが、多くの人間が信じる神は人間の形をしている。それも、エルサレムあたりに住む人種の特徴が顕著で、支那人でもなければ新世界

「うわあ、なんだよこれ。ジェノサイドって言わないか？」河南寺の三匹とイエスがタブレットで図面を見ていた。

「許しがたいことです。許せません。僕の宗教でも狩猟や肉食を禁じてはいません。でもそれは人間が生きて行くために、遊びのためではない。完全に間違っている」最近のイエスは暗い顔ばかりしている。「なあイエス、人間界にはこんな残酷な計画に反対の人はいないの？」ヨハネが訊いた。

「いないでしょう。本来なら倫理の殿堂であるはずのローマ法王庁がノーと言うべきですが、ペテロはカネを積まれれば簡単に黙ってしまいます」

「カネの問題じゃない。次元が違うよ、命がかかっているんだ」アベルが言う。

「いや、同じ次元なんです。人間にとって、命とカネは同列に置かれている。僕たちの価値観と違うといえど、簡単なですけど、彼らの価値観を支えている土台に問題があるのです」

の原住民でもない。そういった神に出会ったと主張する人はいても、会ったことを客観的に証明できる人はいない。しかしそれでも、神は存在すると自分は信じる。

幼いころから聞かされていた話では、神は最初の生き物として人間を作った。だから人間には他の動物を繰る権限が与えられている。動物は人間に奉仕するために存在するとも考えられる。同じ命でも、人間と他の動物とでは扱われ方が違うと、神は説いたという。本当だろうか？エルサレムの教義でも、僕の宗教でも、動物の葬式はできない。結婚式や葬式は人間のためにだけ行なわれる。これは正しいのだろうか？

また、同じ人間であっても、神はエルサレム派を特に優れた民族と認め、人間界のリーダーに選んだ。その根拠は一切説明されていない。どうしてエルサレム派なのか？何故天竺の民族がリーダーではないなかったのか。

今、人間がカナンで大型プロジェクトを立ち上げようとしているのは、こうした神の許しがあるからだろう。神から許可を得るのは、そんなに簡単なもの

だろうか？

僕は深く悩む。神は本当に許し給うたのだろうか。そうは思えない。ただ「だめだ」とは言わなかっただけではないか。いくら人間のためだけに存在する動物だとしても、楽しみのために殺すのは罪だ。また、手付かずの美しい自然を、もっぱら享樂のために破壊してよいはずはない。

自分を疑うのは難しい。まして自分の価値観の一部でも否定するのは苦痛である。しかしながら、ここカナンの地で、僕は自分を構成する思想の根本を再考せざるをえない。

神は存在するか？

存在する、と言い切ろう。ただし、世界を作り、生き物の秩序を定めた存在としてのみ存在する。それは人間の形である必要はない。どんな形でもないかもしれない。タンポポの綿毛のようなものかもしれない。

ローマ法王庁が権力の力で創設された現実から考えて、神の姿も同じように恣意的にでっち上げられたものだと思われる。まず先に人間最優先の発想があり、それに沿うように神の形はデフォルメされ

た。神が世界と生き物を作ったという伝承も操作されているだろう。人間が真つ先に誕生したことが優先権の理由だからだ。すべては一部の人間の思惑で成り立っていると推測するしかない。

僕自身は神の子だ。理由はわからないが、それを疑ったことはない。母はマリヤ、父はヨセフ。するとどうやって神が父親になるのだろうか。これは敢えて考えないことにしている。でも、それ以前に、神が男性である、どうして断言できるのか。

神は何かの意図をもって僕を地上に遣わした。その意図はまったく知らされていない。僕は自分なりに考え、最善と思われることを行ない、最良と思われることを人々に伝えてきた。正しかったと思う。後悔はない。反省もしていない。穴で腰を打って痛かったことだけが残念だ。

カナンの神様は、自分が絶対的存在だとは主張しない。いや、本来主張すべきなのに、しない。自分は神様であるだけだ、という。それは僕がエルサレムの神に求めた態度そのものだ。神様は勝手に神様であって、僕は勝手に神様を崇拜する。そういった関係がもっとも正しいのではないか。信じたり崇め

たりは自分の中で自然にわき上がる心の動きであつて、他人に強制されるものではないはずだ。僕はカ

ナンのネコ型神様を支持する。そして同時に、父母から受け継いだエルサレムの神も信じる。恐ろしい自己矛盾なのはわかってる。できれば矛盾を抱えたまま、そのままの姿で一生を終えたいのだが。

神様は、他の多くの神と違って、他の神様の存在を許している。それどころか歓迎している節もある。その神を信じることで誰かが幸せになるなら、どんな神様だっていいじゃない、と神様は言う。僕は最初、神様が「自分こそ本物だ」という自負で、そう言っているのかと思っていた。ところが実はそうではなく、心の底からそう考えているのだとわかった。一部では、他の神様とモメるのが面倒だからそう言っている、という憶測もあるようだが、あるいはそうかもしれないにしても、その包容力は無限大だ。

これから神様の受難が始まる。相手はエルサレムの神を信じる一団で、さらに悪いことに、名義上だけにしても責任者の一人は僕の母である。カナンの神様を守りたい。カナンの地を壊されたくない。

「それでどうするの？」カインが訊いた。

「どうしましょうか。母を説得できればいいんですけど」イエスは弱り切っていた。

「ねえ、今の話、全部録音してあるんだ。神様に聞いてもらったらどうだろう」アベルが提案した。

「無断で録音したら証拠にならない」カインが混ぜ返す。

「いや、いったん男の口から出た言葉は、世界の誰に聞いてもらっても恥ずかしくないはずだ。イエス、そうだよね？」とヨハネ。

イエスは力なく「うん」と言った。

神様の判断

「おおむね俺が考えてたことと同じだな」録音を聴き終わって口の周りを舐めながら神様が言った。チャーリーとダニエルを紹介したお礼にノアからもらった揚げパンを食べ終わったところだ。「あの二匹はとても役に立つそうだよ。ダニエルは番犬にも向いてるし、チャーリーは力仕事を何でもこなすぞうだ。二匹の世話は娘のアンナがやってるって」

アンナと聞いてイエスは動揺した。そうか、もう大きくなっただ。会いに行きたいな。いや、そんなことを考える場合じゃない。

「それでその、カナンには絶望的に困難な課題が降りかかっているんだけど、とうちゃん、どうする？」揚げパンの残りかすを探している神様にヨハネが言った。

「まあな、困ったことになるかもな。でも、困ってるのは俺たちだけじゃなくて、人間に飼われてる動物たちはもっと困ってるかもしれないし、困ってることもわかってないかもしれない。俺が全部救う

の？どうやって？」

「だからあ、それを決めるのが神様だろ」カインは少しイラついた。

「んな難しいこと言うなよ。どっちにしても、まだ人間は川を渡って来ちゃいないんだ。最初に測量隊とか来るんだろ、きつと」

「来てからじゃ遅いと思う。専守防衛なら先手を打たなきゃ」アベルがシッポに蜂がとまったように急いで言った。

「先手ってなにさ」

「だからあ、それなりの軍事力を用意して川岸の守りを固めたり、場合によっては人間のフェリーを沈めに行ったりとか」

「それ、戦争じゃん。俺は好まんなあ」

「好きでやるんじゃない。身に降りかかる火の粉を払うだけ。そうしないと全身燃えちゃう」

「イエス、アベルの意見をどう思う？」

「えっ、僕の感想ですか？ そうだなあ、理屈としては正しでしょう。でも、もし戦ったら、平和を守るための戦いっていう、どこか矛盾したものになると思います。それに、敵が攻めてくるという不安や被

害妄想を根拠に軍事作戦を正当化すれば、それって人間の指導者とまったく同じになります」

「そうなんだよ。俺はそれが言いたかった」神様とイエスは顔を見合わせて微笑んだ。

河南寺の三匹はあきれ返って、こちらも顔を見合わせた。

「もういいよ、とうちゃんには頼まない。反乱といわれようとクーデターと非難されようと、僕たちは行動を起こす。あとで文句言わないでね」

「立场上、悠長に構えてるように見せてるけど、本当は参ってるんだ。悪いね、こんなときだけ呼び出して」

「まったくね。少しは楽しい話を聞かせてくださいよ」

久しぶりにテレパシーを呼び出した神様は、野原に寝転んで頭の中で話していた。周りの動物からは能天気なヒマネコにしか見えない。

「人間の行ないを見るだけでも、ここもいずれ、とは思ってたよ。こんな楽園を人間が放つて置けくわけないもんね。いつごろ攻めて来るだろう」

「そうですかね。本当に攻めて来ると思ってます？」

「ああ、開発計画図までできてるんだ」

「もう少し深読みできませんか。額面通りに受け取らずに」

「額面も裏書もないだろ。どう読めばいい？」

「それじゃ、ひとつの可能性として言いますけど、マリアとベンダサンのJ.Vは破綻する、っていうのはどうですか」

「みすみす金儲けのチャンス逃がすって？ ありえないだろう」

「いいですか、マリアは有り金全部イザヤに渡してしまっています。それから、ローマが千五百万タラントでカナンを売ると言ったという話も、イザヤが言ってるだけです。マリアはローマに金を払ったのではないでしょう？ イザヤに渡した。わかりませんか？」

「わかんない」

「それじゃ別の話。聖母マリアの肖像権とニセ後継者をマリアが思い出した報酬と、合わせて一千万タラントは、本当に一千万だったのでしょうか？」

「なんだよ、謎々かい」

「だって、マリアが受け取ったのはベンダサンの小切手で、ローマのじゃない。ヘンだと思いませんか？」

「うん、たしかに少しヘンだ」

「つまり、ローマとマリアの間には、常にイザヤが挟まってるわけです。しかもベンダサンはローマの財政を一手に握ってる。ほら、段々臭くなつたでしょう。まだ匂いませんか」

「匂うな。新鮮な草の匂いだ」

「あのねえ、そりゃ神様が草っぱらに寝てるからじゃないですか。そうじゃなくて」

「ごめん、冗談だよ。たしかに怪しげだ」

「真面目にやってくださいよ。それで、いろんな推測ができますが、まずたしかだろうと思うのは、肖像権と思い出し賃を、金額はわからないけどローマは支払っただろうということですよ」

「合わせて一千万じゃないの？」

「そんなのわかりません。一億かもしれない」

「なるほどな。それがホントなら、高い手数料だ」

「ま、一億はただの例ですけど。イザヤがただ働きするわけないから、一千万よりずっと高かったとは思いますが、それがいくらでも同じですよ。現

に今、その全額はイザヤのポケットに戻ってるんですから」

「でもさあ、そのカネでカナンを開発するんだろ」

「さあ、どうでしょうねえ。そもそもローマが『カナンを売る』と言った証拠はどこにもありません」

「じゃ、イザヤはマリアに月の裏側を売ったのと同じかもしれないってこと？」

「はい、そうかもしれません。もしそうなら、カナンの開発話自体がウソです。いくらイザヤでもローマの許可なく新領土なんか作れないでしょう。膨大なカネもかかることだし。金持ちがどうして金持ちかっていうと、自分のカネを投資しないからです。本当にカナンを開発するとすれば、それはローマが開発費に見合つた補助金を出した時でしょうね」

「うーん、そういうカラクリか」

「あくまでもひとつの推論ですけどね。このシナリオが正しいければ、イザヤもローマも、ましてマリアも、カナンには攻めて来ません。ベツレヘムでござちやござちやモメるだけのことです」

「安心したよ。カナンはいつまでも動物の約束の地だ。ますます安眠できるね」

「だめですよ、安心しちゃ。推論なんだし、別のシナリオも考えられるし。たとえばローマがカナンの開発をイザヤに頼んでるのが本当だとしたらどうでしょう」

「それだと近いうちに攻めて来るなあ」

「とも決まっています。ていうのは、これはイザヤにとつてもものすごくオイシイ話だからです。開発がオイシイんじゃないやありませんよ。『開発話』がオイシイんです」

「開発と開発話と、どう違うんだ」

「まるで別物です。いったん実際に開発にとりかかれば、そりゃ工事中はカネが乱れ飛ぶので大儲けできるでしょうけど、開発が終わったあとは、商店やホテルの売り上げからカネをしかなくります。つまり面白味のない儲けしかできません。ところが開発話なら、マリアが引つかかったように、世の中の強欲な連中からいくらでもカネを引き出せます。実際にかかる開発費の何倍もカネを集められる。債権化して売り払うのも簡単。なにしろローマが『開発せよ』と言っているのですから、出資するほうから見れば、これほど堅い話はない」

「だけどカネが集まったら開発するんだろ？ 攻めて来るじゃん」

「ふつうは開発します。でもいいですか、ベンダサンですよ。開発までの期間をなるべく延ばして、最大限にカネを集めるでしょう。で、本筋から外れますが、それほど集金力のあるイザヤに、マリアのカネは必要でしょうか？ JVの契約ではマリアが一千万、イザヤが五百万になってましたね。これが正しいとするなら、カナン開発とその後の儲けの分配は、マリアが二でイザヤが一になる。もう怪しいと思いませんか？」

「たしかに、俺でも怪しいと思うなあ」

「開発が本当だとしても、イザヤはマリアなんか仲間にするはずない。まして利益を分ける気なんかさらさないでしょう。マリアに一千万出させたのは、肖像権なんかで支払ったカネを軽く回収しただけ。それ以上の意味はありません」

「マリアが気の毒になつてきた。昔、餌殿から追い出したときには、アダムとイブを鬼のように悪賢い、世界一の悪党だと思つたけど、イザヤと比べたら純朴な羊飼いのように見える」

「ええ、あの二人は人間としては悪くありませんよ。そろそろ評価を変えるべきです」

「そうする。あの二人はイエスの両親だし」

「じゃ、話を戻して、カネが集まったらイザヤは開発を始めるかという、せっかく手にした大金を、土地の開発ごときに使うイザヤではないと踏みました」

「それだと約束が違うだろ。出資者が怒る」

「いいえ、怒れません。まずローマが『開発はやめた』と言えいいんです。ペンダサンの政治力があれば、そのくらい言わせるのは朝飯前です。それから開発主体のイザヤ土地開発が破産すればいい。首吊りの五人や十人は出るでしょうが、カネはイザヤの懷で眠りこけることになります」

「詐欺じゃん」

「合法的なね。今まで何度も繰り返されたことだし、これからも懲りずに繰り返されるでしょう」

「俺には絶対に正しくないように思える。そんなことが許されるのはおかしいよ」

「許す？ 誰がですか？ 人間の強いものが法律を作り、その法律に背いていなければ、人間界では許さ

れるんです。本質的に許すとか許さないとかは、神様、あなたが決めることです」

「うーん。そうか」

テレパシーの言うとおりのような気がしてきた。そうだよ、イブをビジネスパートナーに選ぶなんて、どうトチ狂ってもイザヤにはありえない。となれば、今のカナン開発自体が眉ツバものだ。神様は、ただちに人間が攻めてくることはないとした。

でも、これで神様の気が休まったかという、全然そんなことはなかった。カナン開発なんて、大体どうでもよかったからだ。神様は解決不可能な、もっと大きな脅威を感じていた。実のところ、この世界は今すぐ終わってもおかしくないところまで来ているのだ。それでも内心はどうあれ、神様は泰然自若としていなければならない。シッポの先を蜂に刺されたネコみたいに、神様がギャアギャア走り回ってしまつては、治まるものも収まらないから。

民主的な、

河南寺の三匹、カイン、アベル、ヨハネは「僕たちは行動を起こす！」と大見得を切ってしまったものの、じゃあどうするかについて良い知恵はなかった。「人間が攻め込んでくるよ」と騒いでも、平和ボケした動物たちにはピンと来るはずがない。切実に感じてもらうには、やっぱりここは情報戦かな。ヨハネはベツレヘムの映像素材とイエスの録音を持って、カナンテレビのクロを訪ねた。

「これで特番を作ろうっていうの？」ひと通り見てからクロが言った。「作れるけどさあ、カナンの自主放送コードに引つ掛かるんじゃないかなあ」

「いつからそんな自主規制が始まったんだ」

「髑髏ヶ丘の張り付け事件から。あんまり人間の醜悪な部分を見せると、動物たちが必要以上に人間を憎むようになるからね」

「このクロ！ お前はいつから人間の犬になり下がった」

「よせやい、ぼくはネコだよ。それに、犬っていつ

ても、自尊心のある犬は人間に盲従しない。ダニエルがそうだ」

「意味が違うつてば。お前と『犬のロボット三原則』やってる暇はないんだ。いいか、人間には醜悪な部分がある。それを取り立てて宣伝しようってんじゃない。とうちゃんの基本方針に沿って、事実をありのままに公表するだけだ。どこが悪い？」

「事実って、どの事実？ ヨハネが持つて来た素材には、大きく分けてふたつの要素があるだろ。虫力メラが撮ったカナン開発計画と、イエスが独白した人間の神についての部分。どっちの事実だよ」

「それは不可分だね。イエスの話は開発計画を支える人間の基本的な価値観だから」

「まずは別の話として捉えるべきだと思っけどな」

「えい面倒臭い。放映するのかしないのかハッキリしろ」

「仏に仕える割には短気だね。もつとも、特に自我が強くなきゃ座禅坊主なんかできないけどさ」

「人格攻撃はやめろ」

「ぼくも犬ではない」

「わかったよ。河南寺の三匹としては、カナンの平

和が乱されようとしている事実を、より多くの動物に知らせただけなんだ。いけないことか？」

「いけなくはないんだ。ただなあ、ぼくも困惑してるんだけど、カナンでの情報の在り方が以前と違ってきてるんで、カナンテレビなんか、もうやめたいっていう気持ちもある。どうしてか聞いてくれる？」

「聞かなきゃなるまいな」

クロは話し始めた。

昔、神様がタブレットを初めて配ったとき、ネットのライブ映像は誰にとつても新鮮な驚きだった。二の十六乗台ある固定カメラと、毎日増え続ける虫型や鳥型の偵察カメラからは最新情報が流れ出てきた。動物たちは競って様々な映像を探し、自分から情報を得ようと必死だった。カナンテレビは重要情報を見逃した動物のために、最新トピックスをダイジェストで放映する機能として始まった。

特に調べたわけじゃないけど、今のタブレットの使われ方は昔と全然違うと思う。みんなゲームにはまってるだけ。世の中の出来事を自分から見に行こうなんていう動物はほとんどいない。今じゃネットは巨大なゲームセンターだよ。カナンテレビの役割

今のカナンなんだ。

「そうかあ、たしかにな。情報をいつでも取り出せる環境は情報難民を生むんだ。皮肉だね」

「皮肉じゃないかも。動物が勝手に愚民化したのかも」

「キツイ言い方」

「ただ、ヨハネのネタは、シカトするには大きすぎる。どうしたらいいのかな。とうちゃんは何て言ってる？」

「いつもの通り、ひたすら困ってるだけ」

「仕方ない、ここは二代目世代が決めるしかないね」

そういったわけで、カナンの各地でノタノタしていた兄弟姉妹の十二匹が集まった。話を聞きつけたマリアも「母親の責任だから」と、喜んでやって来た。誰も神様には知らせなかった。

神様を騒がせないよう、会議はホテル・シオンではなく、河南寺の本堂で始まった。最初にクロが「つまんなくても絶対に眠らないように」と釘を刺した。それからベツレヘムでのシーンとイエスの独白が各自のタブレットから流れ、まず、これをカナンテレ

は、昔みたいに出来事のダイジェスト紹介じゃなくなってるんだ。多くの動物たちにとって、唯一の社会的な情報源になってる。もちろん他にもニュースのまとめサイトとかいろいろあるけど、どのニュースが重要でどれがゴミかは誰かが振り分けてる。カナンテレビもそうだ。ぼくが振り分けてるからね。視聴者は、振り分けた人のフィルターを通してしか世の中を見ていない。

これはとつても怖いことだ。ぼくがあるニュースを流すと、『それだけが』重要ニュースになる。テレビだからニュースの背景とか、これまでの経緯とか、説明したくても限度がある。そうすると『その現象だけ』が出来事になる。怖くないか？

もしヨハネが持つて来たネタを動物たちが見たらどうなるだろう。これは一部の人間の考えですとか、サマリア人はまだいますとか言っても、そんなもの押し潰されちゃう。カナンが人間に乗っ取られるかもしれない恐れだけが一人歩き始めるんだ。

恐怖がカナン中に広がって、戦争をしようっていう連中も出てくる。軍隊だつてできるかもしれない。たった一本の番組がそれだけの力を持つちゃうのが

ジデオンエアするかどうかが話し合われた。

最初に、あの三匹が話し合いから脱落した。ミーアキヤットダンス組のジルバ、ルンバ、タンゴだ。

「カナンにも人間の町ができるなんて素敵。マックキングのハンバーガーも食べられる。ティファニーの支店もできるかなあ。ジュエリー付きの首輪がほしい」等々、一斉に叫んで大騒ぎになった。

マリアが背中毛とシツポを膨らませて、一番怖い声で「お前ら出てけ。産むんじゃない」と睨み付けたので、三匹は急いで本堂から出て、どこかに消えてしまった。

兄弟姉妹会議のはずだったが、やはりマリアに仕切られた。なにしろかあちゃんだし、神様の近くにいろネコだから逆らいうがない。

マリアは、番組をオンエアすべきだと言った。事実はなんだから、それがたとえ『事実の半分の面』だとしても事実に変わりはない。神様のポリシーに従って、何事も隠し立てせず、ありのままをみんなに伝えるのはネコとしての義務だとも言った。

問題はその後で、動物たちの怒りや動揺を、どのようにコントロールし、どこに導くのか、それこそ

が肝心で、まさに政治の仕事になる。神様は困っているだけで何のアイデアもなさそう。いくらすべてを成り行きに任せるといっても、動物が不幸になるのだけは全力で避けなければならない。幸いあたしは総理大臣だから、この際何か考えるよ。

「そういえば、かあちゃんは総理大臣だったんだ」

子ネコたちはどうにか思い出した。

「でも、聞いた話じゃ、かあちゃんは主戦論者だった」

ハナポチが不安そうに言う。

「あのねえ、黒ヘルくらい被ってみせなきゃ神様は真剣にならないよ。あんまり効果なかったけどね。どうやったら目が覚めるんだろう。神様にも困ったもんだ」

「マリアは神様へのアプローチを考えていた。まさか神様の了承を得ないで、何か重要なことを進めるわけにはいかない。」

タイガがみんなを見回して言った。「それじゃ情報部の立場から総理に進言します。いいですか？」

「言ってみな」

「マリアは少し面倒そうに睨んだ。『これまでいろんな情報を整理して分析してきました。もし武力衝突が起きたら、カナンはいちころで負けます。なにしろ人間は火薬っていうのを持って

て、それを使った大砲っていうのは、これまでの投石器の数百倍も威力があつて、一万匹のネコが一度に死ぬくらいです。むぎむぎ殺されるのなら、いつそみんなどこかに逃げ出して亡命政府でも作ったほうが」

「お黙り！ 情報部なら、その大砲とやらへの対処法を考えときな。もしそんな知恵があるならだけど。全員よく聞きなさい、悲観するわけじゃないけど、もうカナンのケツには火がついてる。こうなったら必死で消すか、いつそ美しく燃え尽きるかしかならないんだ。逃げ場なんかどこにもない」

全員がシーンと静まり返った。

「えーっと、いいかな」

キジシロがモジモジしながら言った。「事情がどうでも、どうしても戦争はいやです。攻めて来させない手って、なんかないの？ たとえば河原に人間の大嫌いな臭いを撒いとか」

「クサヤの干物！」

クレバスが吼えた。

結局、マリアの「この際何か考える」に期待して、クロが編集した特別番組は放映された。

神様の人間観察

人間の社会は、どこもかしこも貧乏人だらけだ。国や地域に関係なく、人種も関係ない。ノアの話にあったホームレスというのだろう、家がなくて路上や橋の下で暮らす人たちがたくさんいた。驚いたことに彼らは奴隷でさえない。仕事もなく、食料をくれる人もいない。実際、彼らの一部は奴隷労働が残る他の国に密航して奴隷になろうとさえしていた。社会全体は進歩と発展でどんどん豊かになっているはずなのに、世界は、神様が作って始まったときよりもっと貧しくなっている。極貧に喘ぐ人たちがいる理由は、神様は想像さえできなかった。

さらによく見ると、たとえ仕事があつて家を持っていた食料があつても、多くの人々は奴隷的な生活を好んでいるように思えた。人間には自虐癖があるのだろうか。必死に働いて得た力ネも、日常の生活とごくわずかな娯楽で全部消えてしまうのだ。生きて行くのに必要な、ぎりぎりの力ネしか得られない仕組みだった。そんな生活、奴隷とどこが違うのだ。

もし不幸にも働き口がなくなったら力ネを得る手段がなくなり、その日からホームレスになるしかない。そんな崖っぷち、綱渡りの生き方なんて、とても動物には怖くてできない。

人間が増えすぎたのも一因だろうが、どこかで歯車が狂つてる。本当の楽しみなど、彼らにはあるのだろうか。動物の世界では考えられない、理由の無い暴力や無意味な殺人があちこちで起きているのは、本当の生き方を失った結果かもしれない。楽しみの代替行為なのだろう。

神様は苦手の計算を試みた。不思議だったからだ。チャーリーのような牛、豚、鶏が大量に生産され、大量に殺されて肉になっているのに、ホームレスには食糧が無い。肉はまだ足りないのだろうか。驚くべき計算結果だった。少なくともエルサレムとローマの地域では、きちんと配分すれば、すべての人間が『おかわり』でできるほどの肉が行き渡るはずなのだ。肉はどこかに消えている。

監視カメラに指示して肉の流れを記録させた。答えは三日と経たずにわかった。捨てられていたのだ。食材になった肉は、高価な惣菜になってデリカテッ

センに並び、高いからあまり売れないまま廃棄される。また、レストランに持ち込まれた肉は、一定期間後には消費期限が切れて廃棄される。庶民的なファストフード店へは、大工場で一貫処理された冷凍製品になって供給されるが、工場での加工段階や流通経路で多くがロスになり、やはり廃棄される。

どの売り手も半分程度が廃棄される前提で値段を決めているので、単純に言っても値段は一倍になる。すると庶民は買い控えるようになり、さらに売れない。さらに値が上がり、ホームレスには絶対に手の届かない値段になる。

ここまでは人間のズボラさのせいなので仕方ないともいえる。愕然としたのはベンダサン食肉加工会社とイザヤ骨粉の存在だった。

肉の値段は需要と供給のバランスで決まる。毎日ローマで取引市場が開かれ、様々な肉の卸値が決まる。需要の多いクリスマスや正月、感謝祭などには、当然ながら価格が上がる。価格が天上に張り付いている間は、この二社はなにもしない。価格が下がり始めると、食肉加工会社が買い支えに入って下落を食い止める。いや、世間的には違う言い方をしてい

て、「安くなったから買う」という単純な理由だが、とにかく結果としては肉の価格は下がりきらない。肉は高いままになる。

食肉加工会社は、買い取った肉をそのままイザヤ骨粉に売る。ここでは肉に動物の骨やら内臓やら、由来がよくわからない怪しげなものを混ぜて、乾燥した骨粉にする。加工による付加価値が高いので、多少割高の肉を買っても充分に儲かる。骨粉にはさらに抗生物質、精神安定剤、肥満成分などの薬がタツブリと混ぜられ、完全調合飼料になってベンダサン傘下の畜産業者に売り捌かれる。チャーリーが食べていた粒々入りの粉とは、この完全栄養調合飼料だ。ベンダサンは世界中の食肉を牛耳っていた。実は食肉ばかりでなく、調べれば農業分野でも同じことが起きているのがわかっただろう。作物を一代限りしか収穫できないようにして、タネと苗を専売しているのだ。ときにはわざと害虫に弱いタネを作り、殺虫剤も一手に売るというあこぎな商売もしていた。

これではいつまで経っても状況が良くなる見込みなどない。変わらないか、もっと悪くなるだけだ。

人間世界の経済システムは硬直化していた。何も変わらないとわかっているのだから、そこに住む人間個人が大きな夢を持てるわけがない。せいぜい宝くじに当たる程度の、みみっちい夢しか見られない。「こりゃ、夢も希望もないな」神様は嘆いた。

「奴隷や棄民が多い世の中ほど成長するんです」テレパシーがいきなり割って入った。

「どういうこと？ただ働きをさせられるから？」ごく当たり前の理由だなど思いながら神様は言った。「そういう側面もありますけど、最大の理由は、彼らが見返りを求めない純粋な消費者だからです。いくら財産のある中間層が何かを消費する場合、消費することだけが目的じゃない。というか、別の目的のための消費する場合が多いんです」

「よくわかんないよ。別の目的のための消費って？ホットドッグを食うのは腹が減ってるからで、別の目的なんかないだろ」

「じゃ、ホットドッグで、うんと簡単に説明します。えーと、砂漠の真ん中でホットドッグを売っても、多分誰も買いに来ないでしょう」

「わざわざ行くのはフンコロガシだけだ」

「そうでしょ。でも遊園地でなら飛ぶように売れる、っていうことです。つまり、売るための仕掛けというか道具立てを用意しないとうまく行かない。ところが奴隷や棄民や農民工は、ギリギリいっぱい、生きてだけで精一杯の状態ですから、消費それ自体が目的で、他に条件はありません。だから、ただ与えればいいんです」

「なんか、ゴミを放り投げてみたいだな」

「ええ、そんなところです。彼らを保護したり責任を負ったり、そんなこと社会は一切しません。生きてるのを見て見ぬふりをしているだけです。でも、しっかりと利用はしていて、社会の廃残物を換金する手段にしています。残り物は誰かが始末しなきゃならないですから。もし中間層に廃残物を押し付けたら反撃されるでしょ？神様だって、食べたくないのに余りもののクリームパンを食わされたら、いい気分はしないと思いますよ」

「俺はクリームパンは食わない」

「まあまあ、比喩です。一番いけないのは、経済がすべてを支配している構造そのものです。人間を含

めて、動物はもつと知的であるはずです。カネだけが指標ではないはずなのに、今では政治も宗教も経済の使い走りになってます。どう思いますか？」

「よくない、よくない、よくない」

「連呼しても始まりませんよ。気持ちばかりですが。誰が悪いってわけじゃないんです。ペンダサンが元凶っていうことでもない。自然にこうなっちゃったんですから」

「そう仕向けたやつはいないの？」

「人間全員でしょうね。少しでも多く、他人より多くって、いつも目指してますから。その結果がこれですよ。極々少数の金持ちと、少数の中間階級と、その他大勢の棄民。しかも中間層は絶対に金持ちになれず、簡単に棄民層に落ちるので、年々減ってます。棄民が増えてるだけ」

「それ、見たことある。あつちの世界がそうだ。あつちでは金持ち層まで消えかけてる」

神様は、何かに納得がいったようだった。

「最近、よく人間の活動を見てますね」

「神様の仕事だから、全部を満遍なく見なきゃ」

「気付きませんか？ 戦争ムード」

カナン軍創設

騒ぎ始めたのは例によってサルたちだった。放映直後から「神様とカナンを守ろう」「雨が降るなら傘が要る」「売られた喧嘩で死ぬのはイヤだ」「神を信じるなら神様にひれ伏せ」「いつか裁きが来る」等々、的確なものから意味不明のものまで、様々な声が挙がった。最初はブログとチャットだけの騒ぎだったが、三日もすると水飲み場での大議論に発展し、ついには自警団が結成されて投石用の小石と硬い木の実が河原の近くに集められた。若いサルたちは川に向かって声を合わせ、「来るなら来てみるベシ」などと歌った。

ボスザルたちはいつもの縄張り争いを休戦にして会議を開いた。そして、敵を知らずば戦えないとの結論に達し、急遽公開パネルディスカッションの開催を決めた。パネラーとして呼ばれたのは牛のチャーリーと犬のダニエルだ。本当は人間のイエスカノアを呼びたかったが、過激派の若ザルが跳びかかる危険もあったので牛と犬にしておいた。

「ローマはいつもやってるじゃん。ひとつ終われば、また次の国とモメて」

「そうですね、『ローマは人類の誇り』とか『正義を信じ皇帝に従おう』とか書いたボスターの前で、兵隊が貧民にパンを配ってるでしょ。あれです」

「無料給食だと思ってた。戦争と関係あるの？」

「多分ね。権力が愛国心の高揚を謳うときには、必ず何か狙いがあるんです。今のところは、ヒマで無目的な若者たちを束ねて、無給で働いて喜んで死ぬ義勇兵部隊を作る計画だと推測します」

「どこかを攻める気かな」

「あるいはカナン攻略かも」

「おい、この前と違うじゃん。カナン戦争はイザヤのフェイクだって言っただろ」

「確言はしていませんよ。すべての可能性を考えなきゃ」

「たしかにそうだが、それが神様の仕事だからな。見たくないものまで見なきゃならない。考えたくないことも考えなきゃならない。誰かに代わってほしいよ。あーあ、やな渡世だ」神様は憂鬱だった。

会場のアラファト山麓にはサルだけでなくあらゆる生き物が集まった。こんなに大勢が集まったのは山上の垂訓以来だ。事態を重く見た神様は、タイガ、クレバス、ツンドラの三匹にディスカッションのPA係りを命じた。ちょうど、垂訓のときの機材が置きっぱなしになっていたから、それを使うことにしたのだ。サルたちは、頼みもしないのに神様一派が協力してくれることを意外とも訝しいとも感じながら、PAがないと始まらないので、「まあよろしく」と三匹に挨拶したものだ。

これはタイガ、クロ、ハナボチとマリアの発案だった。どういう集会になるにせよ、カナン政府が協力する形をとらないと、ここで一気に反体制勢力ができ上がってしまう可能性がある。ただでさえ面倒なこの時期に、脆弱な政府と、それに対抗する勢力などに分かれればカナンは自滅するしかない。少しでも影響力を見せ一体感を演出したい。そう思つてのことだ。マイクをセッティングしたりケーブルを啜えて走り回るネコの姿を見て、聴衆は「ああ、神様も味方なんだ」と思うに違いない。そして、実際にすべての生き物がそう思った。神様は自分たちの側

にいる。

このデイスカッションの内容はかなりスレ違ったものになった。動物たちはいつ人間が攻めてくるかを知りたがり、ダニエルは牧童や羊飼いなど、普通の人間について語りたかった。チャーリーは、まだ半分ボケていて、時折「そうだなあ」とか言うだけで終わった。

それじゃあ失敗だったかというところでもない。動物たちは、人間がほとんどモノを考えていないことに気付く、そんな奴らにカナンを取られてたまるかと思いを強くした。

短気なオオスズメバチも聞きに来ていたことが次の展開の要因になった。人間が一步でもカナンの土地を踏んだら、刺して刺して刺しまくってやると、その場でカナン空軍第一連隊の発足を宣言したのだ。出遅れたのがカラスで、第一は取られたものの第三より第二がいいと、あと先を考えずに第二連隊を名乗った。トンビは航空偵察と急降下攻撃の第三連隊、コウノトリは空輸第一連隊を発足させた。オウムとインコは、普段は付き合えないけれど、この際いっしょになってスズメ、ムクドリ、ツバメも

こうした動きを見ていた神様は「おいおい、ついに正義がひとつだけになりそうだな」と、冗談とも本気ともつかずに呟いた。各自が好き勝手に生きるのがカナンのはずだ。百万のアリが東に行くとき、一匹だけ西に行ってもいいじゃないか。神様の溜息をかき消すかのように、カナンの挙国一致体制は完成しつつあった。

「まさに雪崩だなあ」体育会系から文科系に路線変更したハナポチが言った。

「これで動物は人間と同じレベルになるよ」とヨハネ。

「避けたかったわね」キジシロは悲しそうだ。

「地上の最後の楽園が終末に向かっている」クロが囁いた。

「終末だって？ あたしは許さないよ。それに動物は人間と同じレベルでもラベルでもないんだ。別物だからね。同じなんてあたしが許さない」とマリアは言ったけれど、総理大臣として事態を収束させるシナリオは思いつかなかった。

「あのなあ、事態を見て嘆いているだけが政治じゃ

誘って軽爆撃連隊を組織してウンチを落とすことにした。フクロウはもちろん夜間活動特別連隊だ。

民兵組織くらいはできるかなと思っていたマリアは、コトの進行の早さにひどくあわてた。でも、どっちみち今は止めたって止まらないとクロが言うので、静観という日和見を決め込むことにした。

イルカの水軍、カバとワニの沿岸警備隊、サルの上陸軍第一連隊、ライオンを初めとする大型ネコ類の陸軍第二連隊、オオカミ、ハイエナなど犬類の機動攻撃連隊、象とキリンの重機連隊、その他小動物や虫で作る混成連隊が次々にできた。猛禽類だけではこれにも属さずに空陸特化連隊を自称した。しかし一種類、みんなの期待を裏切ってグズグズしていたのがゴリラで、喧嘩なんかしたくないと最後まで尻を上げなかった。サルが交渉に行き、「みんなが戦う非常時に、どうして手伝わないんだ」と責め立てて、結局は救急救命部隊になることで折り合った。

利口なボノボは異変を事前に察知して、全員揃って森の奥深くに疎開してしまい、パネルデイオスカッションにも姿を見せず、誰が探しても見つからなかった。戦争騒動から逃れた唯一の動物だ。

「うわあ、やっぱり老師だ」ヨハネは跪いて祈った。「こうなったのはすべて成り行きだけど、だからと言ってカナンに似合った状態ではない。似合わないければそう長くは続かない。近いうちにウヤムヤになるよ。大体、全部の動物の意思が一致して、民主的に軍国主義国家になったなんて、それ自体マンガだろ？ 戦争に消極的なゴリラはいても、決して反体制ではない。こんな民主的な大政翼賛体制はありえないんだ。一番反体制的なのがホテル・シオンの政府庁舎なんだからね。どっかヘンだよ」

「とうちゃん、それじゃ、どうなるんですか？」とハナポチ。

「どうなる？ そんなこと知らないよ。今大切なのは、どうするかだろ。なあマリア」

「えーと、うーんと、ねえ神様、タイムマシンってないの？ クロが放映する前に戻そうよ」

「五次元目を操作すれば不可能じゃないけど、俺は方法を知らないから無理」

「えっ、知らないんだ。ほんとに役に立たない神様だね。少しは総理大臣の役に立ってよ。あたしはカナンリゾートの件以来、ずーっと激務が続いてるんだ。それにそもそも」

マリアが無茶苦茶な理屈で起死回生を計ろうとしているとき、疲れ果てて悲しい目をしたイエスがやって来た。

「どうもみなさん、お取り込み中、こんにちは」

「よく来たね。サルに石でも投げられなかったかい？」神様が氣遣った。

「それで参ってるんです。カナンの動物の誰も、僕を憎んでいないみたいで、前と同じように笑って挨拶してくれるんです。僕は罪深い人間種なのに。いっそ闇討ちにでもしてもらったほうが気が楽です」

「だってイエスは何も悪いことしてないだろ」

「でもですね、こういう場合、敵性動物として排斥されて当たり前でしょ？ノアさん一家も困ってました。そういう顔してみんなに会えばいいのかって。人間以外の動物は、理性と感情を別個に扱えるんでしょうか？」

「そんな難しいことわかんないけど、みんなイエス

やノアを好きなんだ。人間だと思ってないんだろう。さあさあ、考え過ぎるのは良くない。考えて出て来た答えは、おおむね本道から外れてるから」

「そんなもんですか？」

「そんなもんだよ」ネコたちは声を合わせて言った。「とはいえ、今の俺には理論的な思考も必要なんだ。イエス君、手伝ってくれるか？」神様はイエスを見上げた。

「俺も時には考えるんだ。ただしシンプルに。今問題になってるのは、煎じ詰めれば人間がカナンに攻めて来るってことで、俺たちはそれにどう対応するかってことだ」

「もうみんなの結論は出てるじゃない。いろんな軍隊ができて、戦争するって決めたから、神様はそれに対応に困ってるんでしょ」マリアはあくまで現実しか見ていない。

「まあそうだけど、その前に戻って考えよう」

「意味ないよ、そんなの。事態がここまで進んでるの、わからない？」

「まあまあ待てよ。なあイエス君、一般に、誰かが

攻めてくるとしたら、対応する選択肢には何がある？」

「それほど難しくないです。戦うか降参するか、それとも逃げる」

「お祈りするってないの？」キジシロが訊いた。

「昔はあったみたいですけど、今はないですよ。世界の一部では『戦う神学』って言葉もあるくらいですから」

「みんな、イエスが何て言ったか聞いたか？採り得る選択肢に『逃げる』が入っていたのを聞いたか？それこそ俺が言いたかったことだ」神様はニコニコした。

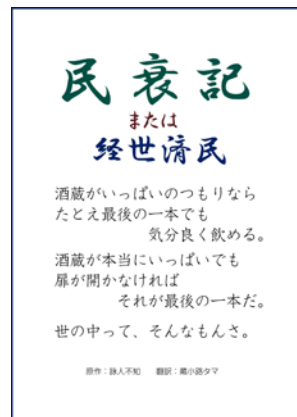
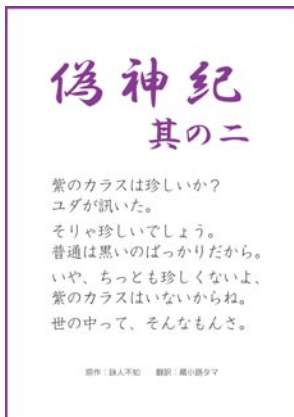
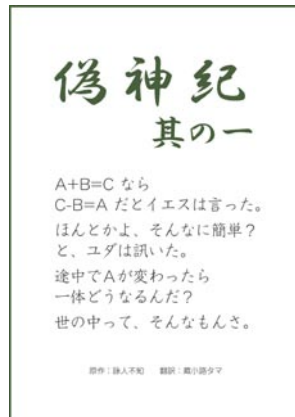
「面白くもおかしくもない。逃げ場があればとつとに逃げてるわよ。世界のどこに避難場所があるっていうの？それに、もしあつても、動物全部を連れてエクサダスやる時間はもうない。あたしは現実にくっついてるんだ」マリアは泣きそうだった。

「ええと、俺は神様だ。それほど役に立つことはできないけど、とりあえず普通の動物じゃない。その気になって気合を入れれば奇跡のひとつやふたつ起こせるかもしれない。マリア、あんまり気にするな。

どうなったところでお前のせいじゃないよ。無責任なネコになっていいんだ。ヨハネ、天竺教的な要素も入れて、この世の終わりの物語を書いてくれ。世界が滅びるストーリーだ。カインとアベルにも相談していい。明日にでもヒントになる話をしてやるからね。ハナポチはクロといっしょに、ストーリーミングの全チャンネルに強制的に割り込む手段を用意しといてくれるか。近々緊急放送したいから。そうだ、もう一度山の上から演説しよう。キジシロはタイガと交代してPAチームを担当して、いつでも音を出せるように機材のメンテを続行。タイガたちには情報部の仕事をやってもらう。イエスはノア一家と一緒にいてほしい。アンナを守ってやっておくれ。そんなもんでいいかな？」

「ねえ、何するつもりなの。教えてよ」とマリア。

「教えたいけど、俺自身、本当にそうなるかわかんないんだ。それが良いことか悪いことかもわかんない。ただ、カナンの動物たちと、心から善良な人間たちを不幸な出来事から守りたい。それだけなんだよ」



哀歌 其の一

発表日
改訂ベンガル暦 1421 年 7 月 19 日
フツの西暦では 2014 年 11 月 3 日

著ネコ：蔵小路タマ（イラストも）
仕方なく著作権管理させてる人：大塚 明

いないだろうけど、転載するときは管理人に言ってね。黙ってやったらヒッカク！

著ネコ近影



ストロボやめてよ。目が怖いじゃん



だんだんボロが出て来た。アタシ思うんだけど、資本主義にしても社会主義にしても、タテマエとしての原理原則は、盲目的な性善説に立脚してるんじゃないかって。立脚だよ、脚立じゃないよ。どっちにしても上り詰めたら危ないのに変わりはないけどさ。どういふことかって言うと、金持ちが良い人ばかりなら、自分が儲けた余りを貧乏人に喜んで分け与えるはず。そうすれば、社会の発展にしたがって貧乏人はいなくなるはず。「はず」だよ。社会主義では、全員が全員のこと考えて、誰も抜け駆けしないでいっしょに発展すれば、みんなが同時に豊かになるはず。労働のプランを立てる人も、プランに従って働く人も、どっちが偉いってわけじゃなくて、それぞれの役目で役割分担だから、みんな同志で平等なはず。「はず」だよ。

「はず」が成立するのは、人間が本来的に良い生き物であるっていう条件が正しいときだけ。あんまり楽観的すぎるよね。誰かがわざと楽観したんじゃないの？ みんなを安心させて世界が終わるまで時間稼ぎするために。で、無責任な社会理論や経済理論を書きまくった。そんなのネコは絶対書かない。さて、カナンに危機が迫ってる。動物たちはチャリーを見て自分たちの立場が弱いことを思い知らされた。これはもつ人間と一戦交えるしかない？

んじゃ、またね。

タマ